

建築の

職人

■木を魅せる

現在の住宅建築は、柱と梁によって建てられる「木造軸組工法」と2×4（ツーバイフォー）など壁面により支えられる「木造枠組壁工法」の大きく2通りの建築工法に分けられます。

国内の多くの住宅建築は「木造軸組工法」での建築が行われています。「木造軸組工法」は、構造の要となる柱や梁、筋交いに杉などの製材品を使って

おり、建物構造に強度を持たせる点で木を活かしています。

また、柱や造作などで木材を表面に出し木を魅せることで木を活かすことや、木の良さを活かすことにつながります。いかに木を魅せるかが、大工職人の腕の見せ所となります。

「木造軸組工法」は日本独特の優れた建築技術です。住む人の生活環境の変化に対応した増築や改築にも柔軟に対応でき、住宅を長く使い続けることができる建築工法です。



■技術をつなぐ

最近ほどの業種にも共通することではありますが、後継者の育成が課題と感じています。この業界は働く環境も条件も他業種と比較して決して良い状況ではありません。それらの課題は、商工会と連携しながら改善が必要だと思えます。また、現在は商工会の建工部会で小学生の木工教室などを行っています。そういった地道な活動も重要と感じています。

もうひとつが技術の伝承です。現在は、木材を刻む作業は工場でのプレカットが多くなってきていますが、増改築



ほそやしげひこ
細谷 重彦さん

■大工の醍醐味

一言でいうのなら「好きでないとできない仕事」です。大工仕事は、雨が降っても暑くても現場は動きまわすし、刻みの作業などは、細かく神経を使う地道な作業です。それは、現地状況に合わせた対応が必要であり、手作業での対応が必要となります。大工は新築だけでなく増改築などお客様の生活の変化に合わせてさまざまな対応が必要です。そういった対応や魅せる和室など、日本建築の魅力を守っていくためにも技術の伝承が必要と感じています。

では、現地状況に合わせた対応が必要であり、手作業での対応が必要となります。大工は新築だけでなく増改築などお客様の生活の変化に合わせてさまざまな対応が必要です。そういった対応や魅せる和室など、日本建築の魅力を守っていくためにも技術の伝承が必要と感じています。

■さつぱん

この仕事を次の世代に伝えていくために人を育てていかなければいけないと感じています。大工も製材も木に関わる仕事ですが、長い年月をかけて技術が練磨される業種。技術はすぐに身につくものではありません。私たちが先輩方に育ててもらいました。これからは私たちが若手の技術者を育てていく番だと感じています。

十王在住。先祖は河北町出身で十王地区の関寺の建設に携わり、その後十王地区で建築業を営む。現在の重彦氏で4代目。白鷹町で建築業を始めて100年以上の歴史を誇る。他業種に就職後、22歳で家業の建築の道へ。現在は、町内を中心に住宅の新・増・改築などを手がける。

もり 森林と共に

設計の職人

■進化する木造建築

これまで木造建築の対象は主に住宅や小規模施設、寺院等であり、ビル等は木造以外の方法で建てられてきました。

しかし、2015年パリ協定の採択そして2020年10月に、当時の菅内閣総理大臣が所信表明演説において、日本は2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする脱炭素社会の実現を

目指すと宣言し、二酸化炭素の排出削減・吸収に、より一層取り組むことになりました。

日本は世界の中で5番目に二酸化炭素排出量の多い国で、中でも鉄鋼業が上位を占めています。そのため、鉄鋼業に

頼る建築ではなく、より二酸化炭素の排出が少ない木造の建築物を建てるのが地球温暖化対策となります。また、現在、金物やCLT等の普及による耐震性・耐力性の向上や、木造耐火構造の技術の発展により、木造建築でも火災

による倒壊を3時間防ぐことができるようになりました。その結果、14階建ての木造ビルの建築も可能となりました。

■木への関心

現代の子どもたちは、地球温暖化に対する意識が高いと思います。その意識をより向上させるためにも、木材の炭素貯蔵量の見える化が重要だと思っています。例えば30坪の家を建てるのに約20平方メートルの木材を利用します。この20平方メートルの木材には、約5トンの炭素が貯蔵されており、これを二酸化炭素に換算すると約18トンの固定されていることになり、見える化により、

身近な物がどのくらい地球温暖化の防止に貢献しているかがわかります。これは住宅に限らず、木造のイスや踏み台等の自ら製作した木工作品にも言えます。

また、現在、認可地縁団体 鮎貝自彊会の森林にて、Jクレジット制度に取り組んでいますが、地元の森林の二酸化炭素の吸収量を知ることにも

つながり、地球温暖化の防止に貢献していることを学習する機会にもなるほか、その貢献度が地元住民の誇りになります。

■やうけん

住宅は2025年に現在の省エネ住宅の基準が標準となります。また、2030年にはZEH※1水準が標準となります。多雪地域では太陽光

パネルの設置により木材の規格を大きくすることが求められます。その分使用する木材の量が増え、費用も多くなることとなるため、今後は新築よりもリフォームの件数が増えると考えています。リフォームは既存の建物に対する

創意工夫が必要となるため、

新築とは異なる技術が必要で、職人の確保はもろること、若手に技術の継承をしていかなければなりません。その技術継承のひとつとして、

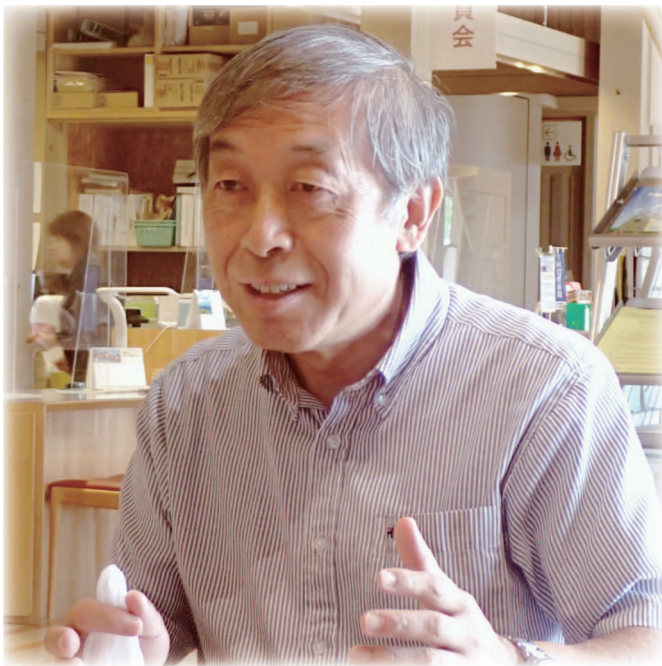
今年の産業フェアでは、木造部材の接合部である仕口や継ぎ手を展示します。伝統的な技術を継承していく方法を模索し、今後もさまざまな活動を行いたいと思います。

※1 ZEH(ゼッチ)とは

[Net Zero Energy House(ネット・

ゼロ・エネルギー・ハウス)の略

称。断熱性や省エネ性、太陽光で発電したエネルギーなどで住宅のエネルギー収支が概ねゼロとなる住宅。



ごとう けいいちろう
後藤 敬一郎さん

認可地縁団体鮎貝自彊会理事長、白鷹町商工会建工部会長。鮎貝在住。

建築設計業を営むかわら、令和5年7月大規模な森林を所有する認可地縁団体鮎貝自彊会の理事長に就任。伐期を迎えた森林の主伐再造林や町内小学生に対する森林学習や町産木材を利用した木工体験、地域イベントにおける木に触れる機会づくり等、さまざまな立場から木材利用に向けた活動に取り組む。

平成30年4月～：白鷹町商工会建工部会部会長

令和3年7月～令和5年6月

：認可地縁団体鮎貝自彊会 副理事長

令和5年7月～：認可地縁団体鮎貝自彊会 理事長